

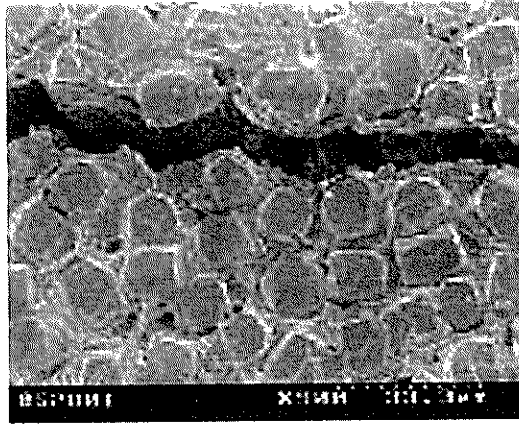
約1,200年前、縄文時代草創期の鳥浜貝塚からウルシの木材が出土してから、縄文時代晚期までウルシが国内で栽培されたと考えられている。遺跡内でウルシが栽培されていた根拠として、ウルシの木材（加

工木）、ウルシの果実、ウルシの花の花粉が出土することが挙げられる。そのためにはウルシの木材・果実・花粉を同定しなければならぬが、近年まで日本に生育するウルシ科の植物（ヌルデ・ヤマウルシ・ツタウルシ・ハゼノキ・ヤマハゼ・ウルシの6種）について、種レベルの同定は行われなかった。

木材は組織の構造の違いを見いだして同定を行う。能城氏（森林総合研究所）が木材の構造が近似するウルシとヤマウルシについて、ウルシの道管の大きさに着目して分類、同定に成功した。吉川氏（古代の森研究）により花粉は表面の彫紋模様から種レベルの同定に成功した。

果実は通常は形体などで同定を行うが、日本に生育するウルシ6種の果実は形体の変異が大きく、種間で近く、種間で近似的に似ていた。

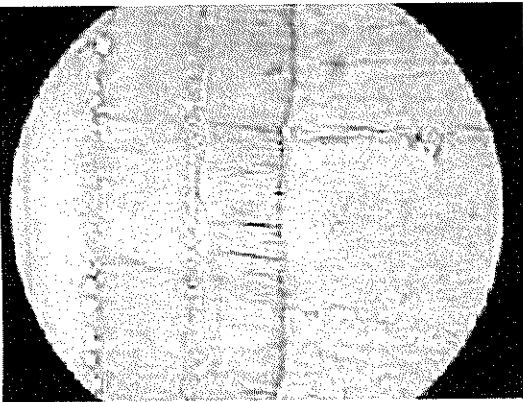
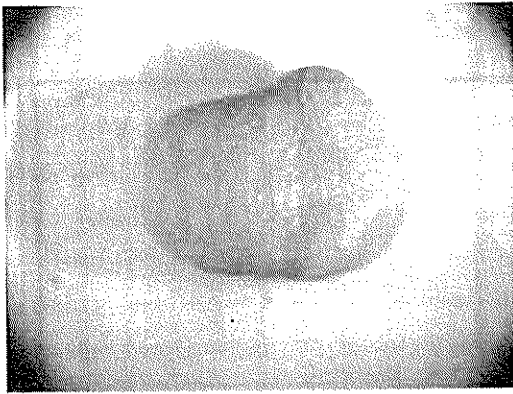
現在の試料からウルシを同定した後、遺跡から出土した木材や花粉を比較して同定する。その結果、青森県では約6,000年前縄文時代前期から縄文時代晚期まで遺跡周辺でウルシが栽培されていたことが明らかになった。縄文時代前期の岩渡小谷（4）遺跡ではウルシが出土した同じ時期からクリの花粉が増加し、集落の周辺にクリの純林が形成された可能性があり、縄文人が植物に積極的に関わったことが考えられる。世界的に食料となる植物の栽培化の起源は古く種類も豊富であるが、食料ではない植物の栽培として、ウルシはかなり古いものの一つであり、めずらしい存在である。



上右 現生ウルシ果実内果皮

上左 ウルシ果実内果皮表面組織

下 ウルシ果実内果皮断面組織



青森の漆

— 縄文時代③ —

伊藤 由美子

（県民生活文化課

県史編さんグループ 主幹）

北海道垣の島A遺跡から約9,000年前の漆製品が出土してから、縄文時代以降、ウルシがどのように栽培されたかを検証するために、木材・果実・花粉の種レベルの同定作業が進められた。同定作業は基本的に現在生育する木から試料を集める。

北海道垣の島A遺跡から約9,000年前の漆製品が出土してから、縄文時代以降、ウルシがどのように栽培されたかを検証するために、木材・果実・花粉の種レベルの同定作業が進められた。同定作業は基本的に現在生育する木から試料を集める。